

## 第5節

# 園外研修

園外研修を受講する頻度は国公立幼稚園が最も高い。全体的な傾向として、幼保合同研修への参加頻度と園外研修に参加する時間帯の勤務の扱いに課題が見受けられ、今後は研修に参加しやすい労働環境や設置区分を超えた研修の受講が求められる。

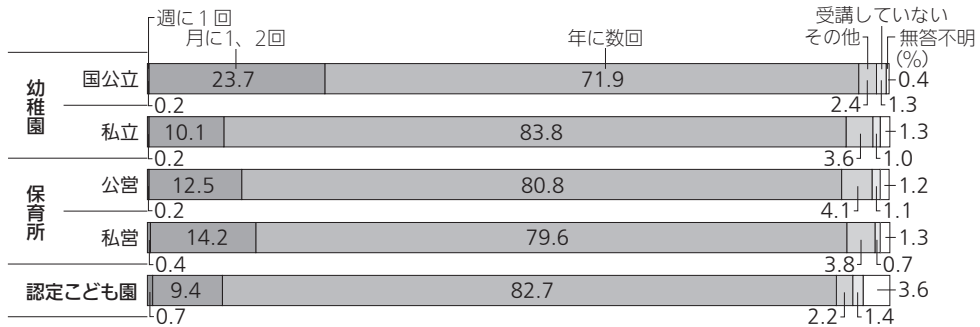
園内研修に対して、保育者が園外で研修する機会はこの程度あるのだろうか。また、どのような園外研修を受講しており、その際の勤務はどのように扱われているのであろうか。そこで園が許可して保育者が受講する園外研修（幼稚園教員については、法律に定められた新規採用職員研修、10年経験者研修、免許状更新講習を除く）について、①一人の保育者が園外研修を受講する頻度（図5-5-1）、②行政や他園、関連諸団体が主催する幼保合同研修に参加する頻度（図5-5-2）、③保育者が園外研修に参加する時間帯

の勤務の扱い（図5-5-3）、④保育者が受講する園外研修の主催者（図5-5-4）を分析した。

### 1. 一人の保育者が園外研修を受講する頻度

図5-5-1からは、すべての設置区分において、「年に数回」の頻度で園外研修を受講する割合が多いことがわかる。また、園の設置区分別でみると、国公立幼稚園の23.7%が月に1、2回の頻度で園外研修を受講しており、ほかと比べて受講頻度が高い。

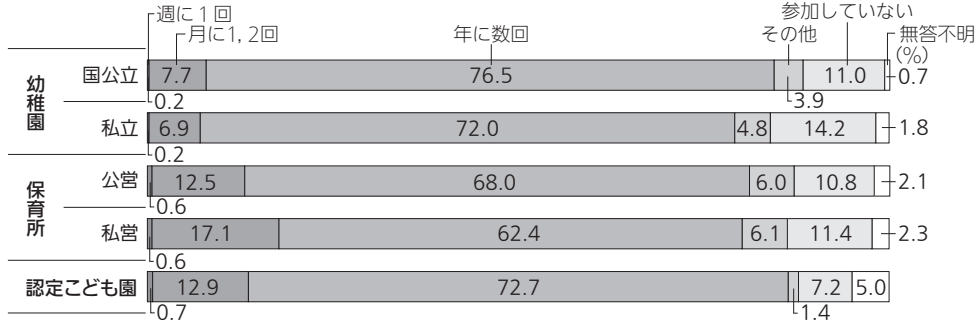
図5-5-1 園外研修の受講頻度（園の区分別）



注1) 園外研修は園が許可して保育者が受講する外部の研修など。幼稚園教員については、法律に定められた新規採用職員研修、10年経験者研修、免許状更新講習を除いた研修を指している。

注2) 園で一人でも参加すれば、1回とカウント。

図5-5-2 幼保合同研修への参加頻度（園の区分別）



注) 園で一人でも参加すれば、1回とカウント。

---

---

### 2. 行政や他園、関連諸団体が主催する幼保合同研修に参加する頻度

---

---

園外研修のうち、幼保合同研修に焦点化して分析した結果が図5-5-2である。図5-5-2からは、すべての設置区分において「年に数回」の受講がもっとも多く、園の設置区分別では、認定こども園の受講頻度が高いことがわかる。こうした結果の背景には、認定こども園が保育所と幼稚園双方の機能を兼ねそなえた施設であり、ほかに比べ、実際の保育において幼保合同研修の必要性が高いことが反映していると考えられる。

---

---

### 3. 保育者が園外研修に参加する時間帯の勤務の扱い

---

---

園外研修に参加する際の勤務の扱いに関する結果をまとめた図5-5-3をみると、すべての設置区分で、「勤務時間内」として扱われることが多いことがわかる。しかし私立幼稚園、公営保育所、認定こども園では「勤務時間外が多いが、超過勤務扱いにはしていない」という割合も多く、保育者が研修の必

要性を痛感していても、勤務時間としてみなされず、超過勤務としても認められないため、園外研修に参加できない状況が生じていると推測できる。また、こうした結果が図・表5-3-1 (P.98) における「保育者の資質の向上」には「園外研修に参加する機会の保障」が必要であるとの結果に反映したと考えられる。

---

---

### 4. 保育者が受講する園外研修の主催者

---

---

図5-5-4から、国公立幼稚園、私立幼稚園は幼稚園関連団体の研修を受講することが多く、保育所や認定こども園関連団体が主催する研修にはほとんど参加していない一方、公営保育所と私営保育所では、保育所関連団体の研修の受講が高く、幼稚園や認定こども園関連団体の研修にはほとんど参加していないことがわかる。先述した幼保合同研修の参加頻度(図5-5-2)が「年に数回」であることをふまえると、今後は認定こども園への移行も見据えながら、設置区分を超えた研修が課題になると考えられる。

図5-5-3 園外研修に参加する時間帯の勤務の扱い（園の区分別）

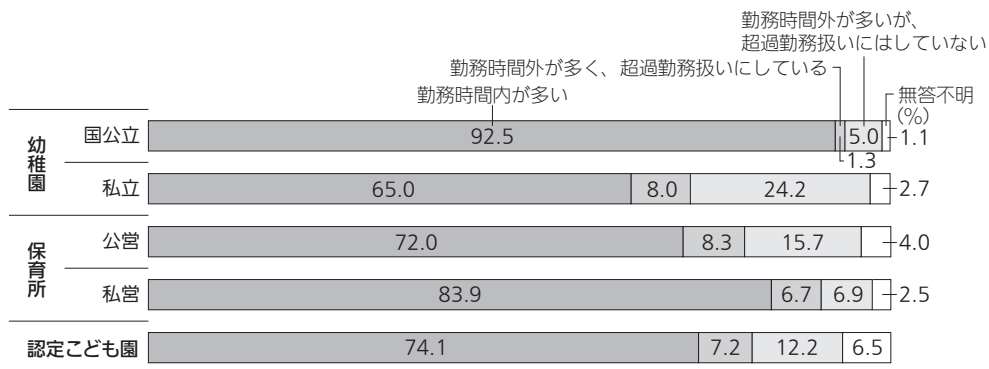
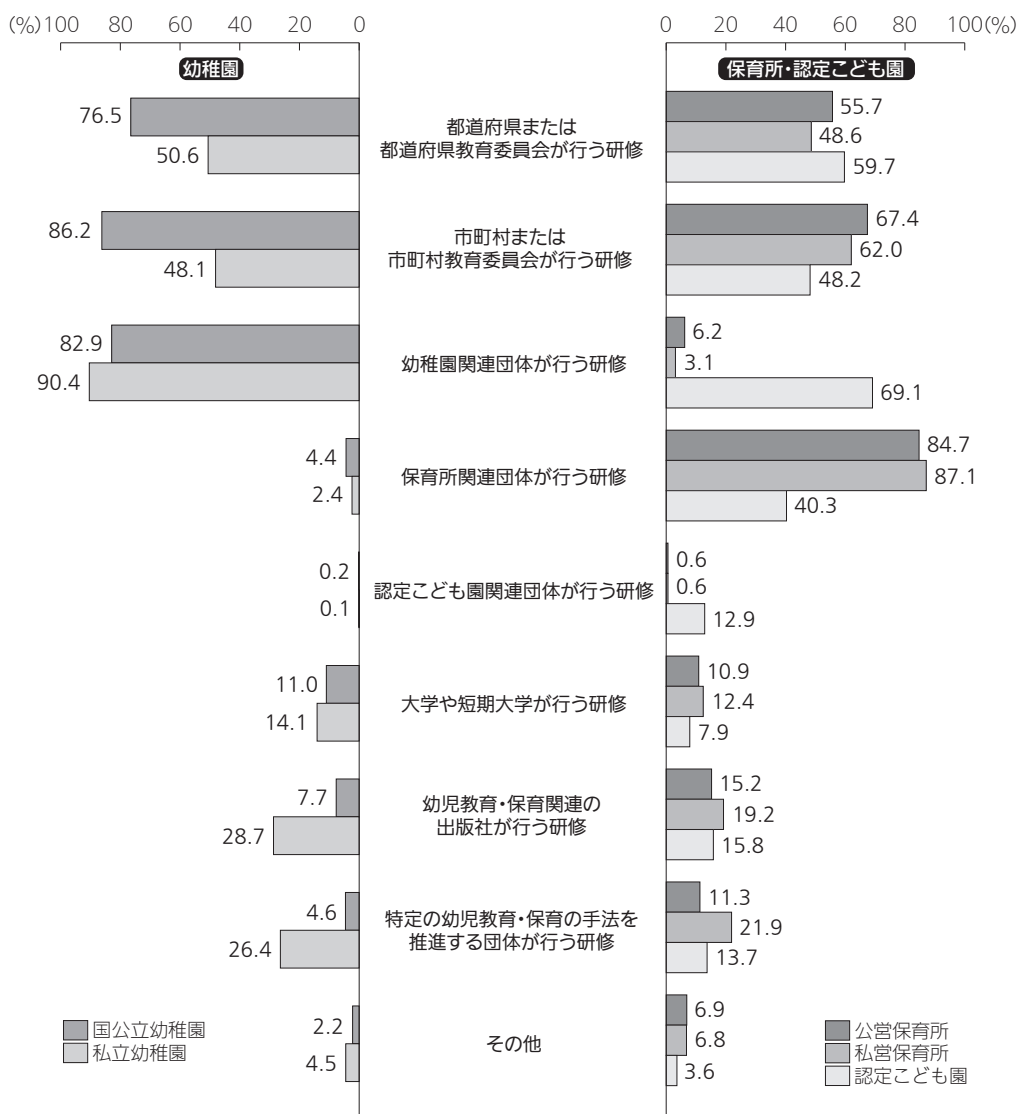


図5-5-4 園外研修の主催者（園の区分別）



注) 受講する回数が多いもの3つの合計。